

麻疹 命定めと呼ばれた病

麻疹は麻疹(ましん)ウイルスによる感染症で、10世紀に「赤斑瘡(あかもがさ)」という名前で記録されており、江戸時代にははしか、いなすりと呼ばれました。

麻疹にかかると発熱や咳などの症状を経て、4、5日間全身に赤い小さな発疹が続きます。麻疹は疱瘡より感染力が強く、「麻疹は命定め」、つまりかかると命を落とすと恐れられた病気でした。また、妊婦がかかると親子とも重症になりました。

病気とどのように闘ったか

江戸時代には、麻疹の流行時に麻疹にかかってもすぐに直るまじないの方法や食べてもよい物・悪い物のリスト、養生法などが書かれた「はしか絵」が盛んに作られました。麻疹には特效薬はありませんでしたが、また、高熱が出るため、解熱作用のある烏犀角(うさいかく)がよく用いられたといわれています。

麻疹は感染力が強く、一度流行するとその地域の住人のほとんどがかかるため、免疫ができた人の数が多い間は大規模な流行は見られず、15～20年間周期で流行しました。そのため医師が麻疹の患者を診察することは生涯に一、二度であり、治療経験が少ないために治療が難しかった一面もあったようです。

医師・橋本伯寿(はしもと・はくじゅ)は、文化7年(1810)に『断毒論』を著し、痘瘡、麻疹などの病気は「伝染」するものであり、疱瘡や麻疹にかかった人を隔離するなどして接触せず、交通を遮断すれば、かかることはないと当時から既に主張していました。

麻疹の時に食べてよい物・悪い物

人々はそれぞれ麻疹にかかった経験から、「はしか絵」という刷り物を作り、麻疹の際に食べてよい物と悪い物を紹介しました。

【例】食べてよい物

かんぴょう、大根、かたくり、古たくあん

食べて悪い物

川魚、ごぼう、ねぎ、こんにゃく、そら豆



麻疹養生伝
文久2年のはしか絵

麻疹の病魔はこんな姿?



村の外へ送り出される麻疹の神
病魔の体にも発疹が描かれている。